新制
人
110

学位審査報告書

（ふりがな） 氏　　名	つじむら　まさひで 辻村　優英
学位（専攻分野）	博士（人間・環境学）
学位記番号	人博　第　451　号
学位授与の日付	平成21年3月23日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当
研究科・専攻	人間・環境学研究科 共生人間学専攻

（学位論文題目）

苦しみという名の贈りもの
――ダライ・ラマ１４世における思いやりと
普遍的責任――

論文調査委員	主査　教授　髙橋　義人 副査　教授　山田　孝子 副査　教授　田邊　玲子 副査　教授　鎌田　東二 副査　教授　室寺　義仁

人間・環境学研究科

氏名	辻村　優英

（論文内容要旨）

本学位申請論文は、現代社会に蔓延する孤独感、疎外感、人間関係の物化を解決する糸口をダライ・ラマ14世（以下、ダライ・ラマと表記する）が提示する「思いやり（共苦）」および「普遍的責任」のなかに見いだし、それについての考究を試みたものであり、ダライ・ラマの亡命以降に出された著述のほぼすべてを踏まえた徹底した文献学的調査および7カ月にわたる北インド・ダラムサラでのフィールドワークに基づいた宗教学的論考である。

第一章は、ダライ・ラマの宗教観の変遷の跡をたどり、彼が「宗教」と「スピリチュアリティ」の区別に到達した必然性を探りながら、チベットの政治体制を特徴づける概念である「チュゥスィ・スンデル」における「チュゥ」概念の変遷を分析している。それによって、ダライ・ラマが「思いやり（共苦）」に宗教の枠を超えた「普遍的チュゥ」、すなわちすべての人間にとって必要不可欠な心の質を見ていることを明らかにしている。「チュゥスィ・スンデル」とは「宗政和合」すなわち宗教（チュゥ）と政治（スィ）の和合（スンデル）を意味する。先行研究を参照しながら、伝統的な解釈では「チュゥ」は「仏教」のことを意味していたと本論考は指摘する。次いで、亡命後のダライ・ラマの発言を精査し、ダライ・ラマが伝統的解釈にとらわれない新しい見方を示していたと説いている。ダライ・ラマは、仏教としての「チュゥ」の意味を下地として保持しながらも、それに加えて、人々に役立つ心の質（スピリチュアリティ）を重視し、そうした心の質へと変革することをも「チュゥ」という言葉によって捉えているという、先行研究では指摘されてこなかった独自の解釈を展開している。ダライ・ラマはこうした人々に役立つ心の質を、宗教の別を超えたメタ宗教、すべての人々にとって必要不可欠なものとして「普遍的チュゥ」と名づけ、彼のいう「思いやり（共苦）」こそ「普遍的チュゥ」の筆頭に挙げられるものであると力説している。

第二章では、ダライ・ラマのいう「普遍的チュゥ」としての「思いやり（共苦）」にはじつは互酬の論理が内在しているという独自の説が展開されている。ダライ・ラマが「有情が苦とその原因から離脱するように欲すること」と定義する「思いやり（共苦）」（ニンジェ、悲）は、「他者が苦しむことに耐えられないこと」をも意味している。この「耐えられなさ」は、自我意識の存在と、自我意識のもつ「苦しみを欲さない」という欲求が自他共に同じく有しているという「自他平等」の認識によって生じる。看過してはならないが、この見解は、ダライ・ラマの属する中観帰謬論証派、特にダライ・ラマが依拠するシャーンティデーヴァの『入菩薩行論』が説く論理、すなわち自我意識の空性にもとづいて「思いやり（共苦）」が生じるという論理に完全には従っていず、ダライ・ラマは伝統的なチベット仏教をいわばはみ出している。彼はシャーンティデーヴァの論理を踏襲こそしているものの、「思いやり（共苦）」を「普遍的チュゥ」として説くときにかぎって、自我意識の空性という仏教独特の論理を持ち出さない配慮を見せている。むろんそれは、彼が宗教の別を超えたメタ宗教を目指しているからである。そう指摘する本論文は、自我意識の空性の論理を用いずに、自他平等のみから「思いやり（共苦）」

が生じるとするダライ・ラマの論理には互酬の論理が内在していると主張している。そこでは、互酬において自他間の非対称性を生じさせる「贈りもの」としての役割を他者の苦が、また非対称性を解消させようとする感情に相当する役割を、自他平等の認識によって生じる「耐えられなさ」が担っている。非対称性を解消しようとする「耐えられなさ」にしたがって目指される対称性は、自己が他者の苦を苦しもうとすること、および他者が苦から離脱するようにと欲することであり、この両者がダライ・ラマのいう「思いやり（共苦)」である。そう本論文は主張している。

第三章は、ダライ・ラマ独自の概念である普遍的責任（Universal Responsibility）の意味内容を明らかにし、普遍的責任のチベット語用例の調査やダライ・ラマの言説の分析が不十分であった先行研究の欠点を補っている。Universal が「環境としての世界」「有情としての世界」「普遍」を意味しているとすれば、Responsibility は「菩薩の勇ましい心」すなわち「大悲」を意味していることを、本論文はチベット語の用例およびダライ・ラマの言説についての分析から論証している。それによって、普遍的責任の意味するところが、「贈りもの」としての他者の苦を遍く共有し、自ら他者の苦を取り除こうと応答する意思にあることが明らかにされるという。また、「思いやり（共苦)」（悲）を発展させた「大悲」を非仏教的な文脈で語るとき、ダライ・ラマは普遍的責任（Universal Responsibility）という言葉を用いているともいう。

こうした一連の分析を通して本学位申請論文が究明を試みているのは、人間関係が物化した現代社会において、「心」の通った人間関係を取り戻すのに、ダライ・ラマが提示した「思いやり（共苦)」の論理がいかに重要であるかということである。ダライ・ラマが、宗教信仰の有無に関係なくすべての人間にとって必要不可欠なものとして提示した「思いやり（共苦)」は、他者の苦を「贈りもの」として受け取ることにより、他者を「物」ではなく「心を有するもの」として見るような論理を内包するものである。その点を、数多の文献を渉猟し、３度にわたるチベットでのフィールドワークを通して明らかにしようとしたのが本博士申請論文である。

氏名	辻村　優英

（論文審査の結果の要旨）

ダライ・ラマ14世（1935～、在位1940～）は、チベット民族のあいだで深く敬愛されているのみならず、現存する宗教家のなかで世界中で最も注目されている人でもある。彼はチベット仏教の最高指導者としてチベット民族に対してはチベット語で語る一方、諸外国に対しては英語で語り、物質主義化し、人々が孤独に苦しむ今日の世相を厳しく批判している。

そのためダライ・ラマを研究するには、チベット語と英語の双方を自由に読みこなせなければならない。

現代日本のアノミー化した世相に疑問を抱き、「心の復権」を目指す学位申請者は、長年にわたってチベット語を習得するとともに、インドのダラムサラの亡命チベット人社会に3度滞在し、生活のなかにうかがえるチベット人たちの宗教観を観察するとともに、チベット仏教やダライ・ラマ14世に関する、日本の図書館では決して得られない夥しい数の貴重な文献を渉猟することによって、ダライ・ラマの思想のどこに、物質主義化・アノミー化した現代社会にとっての光明があるのかを明らかにしようとしている。つまり本論文の眼目は、現代思想から見たダライ・ラマ思想の意義を浮かび上がらせることにある。

そこで学位申請者が特に注目するのは、特にインド亡命後(1959年)以降にダライ・ラマが展開していく compassion（思いやり［共苦］）の思想である（チベット語では「思いやり［共苦］」は、ニンジェ snying rje、あるいはツェワ brtse ba)。言うまでもなく compassion は、イエス・キリストの受難(passion)を追体験することによって、この世に生きる人々の苦しみをわが身に引き受けることを意味している。ダライ・ラマは、この思想がチベット仏教で言う「普遍的チュゥ」に相当するものと捉える。

共苦を抱くことによって人間は人間らしくなり、心の復権がなされる。しかし共苦が生まれるためには、それに先立つものとしてまず他者の苦がなければならない。したがって他者の苦は、「心を有する」すべての人々にとっての「贈り物」である。この「思いやり［共苦］」の本来的な内在こそが、仏教の基本思想をなす「慈悲」、わけても「大悲」の意思（「他者の苦を遍く共有し、自ら他者の苦を取り除こう」との＜大いなる共苦＞の意思）を抱かせしめるものであり、この意思を、ダライ・ラマは、英語で「普遍的責任」と説くとともに、ここにこそ世界中の宗教を統合する普遍的宗教（Universal Religion）があると考え、それをスピリチュアリティと名づけている。その論旨は明快である。

学位申請者は、個別宗教を越えた普遍的宗教を目指すダライ・ラマの試みのなかに、誰しもが自分のことしか考えなくなった現代社会の閉塞感を打破する重要な手がかりがあると考えている。学位申請者の悲痛な個人的体験に裏づけられた筆致には感動さえ覚えさせられる。

本学位論文に関しては、本研究科の調査委員3名と他研究科の宗教学を専門とする調査委員1名に、チベット仏教研究にかけてはわが国随一の調査委員1名が加わって綿密な審査が行われた。当初提出された論文に対してまず大幅な改稿が求められた。改稿によって論の展開は緻密になり、それをもとに平成21年1月29日、論文内容とそれに関連した事項について公聴会を開催し試問を行った。ダライ・ラマの思想を浮かび上がらせたという意味でも、またそれを通して現代社会の混迷を逆照射したという意味でも、本論文の意義は大きい。それだけに、学位申請者の次の仕事に対する期待をこめて、調査委員のあいだからは、今後は次の点に留意するようにという指摘がなされた。

1）学位申請者の基本的な主張には多大の敬意を表するが「苦」と「共苦」の関係を学位申請者の言うように、どこまで「互酬」の論理によって説明しうるかについては、識者のあいだで意見が分かれるだろう。「互酬」の論理に

関しては、さらに考察を深めたほうがいい。また「互酬」の論理に関する議論を展開する以上は、モースの『贈与論』以外のフランス現代思想における議論を参照したほうがいいだろう。

２）学位申請者は「慈悲」という仏教用語の「悲」に注目し、それを「共苦」と結び付けているが、「慈」と「悲」の関係をもっと詳述したら、さらに深みのある論文となるだろう。

３）ダライ・ラマはゲルッ派の偉大な導師であるだけでなく、亡命チベット人社会における政治的リーダーでもある。現在チベット仏教の寺院は、外国からの寄進に大きく依存しているため、外国に出かけて行って教えを説く必要もあれば、外国人に分かるように英語も用いなければならない。本論文が力作であることは確かだが、このように彼の発言がなされた各々固有の文脈をもっと踏まえたら、論文はもっと立体的になるであろう。

４）そもそもダライ・ラマの生涯と思想をテーマとする以上、歴史、民族、国家、そして現代の欧米先進諸国におけるさまざまな問題を、広い視野から、しかも専門性の裏付けを備えた上で分析を試みなければならない。他方、ダライ・ラマの思想形成の上で最も影響のある仏教教義についての理解もまた、ブッダの思想そのもの、チベット仏教展開後の特にゲルッ派における思想展開、さらに、ダライ・ラマがことに信奉するシャーンティ・デーヴァの教えなどについて相応の識見が求められることになる。どの見解をもって、ダライ・ラマ固有の思想信条であるのか、さらに正確に見きわめる余地がある。

５）本論文では、宗教とスピリチュアリティとの区別から始まり、ダライ・ラマの言う「スピリチュアリティ」の内実の分析が試みられている。その際には“spiritual qualities” と “spiritual values”との違いをもっと明確にしたほうがいいだろう。

６）２度目の改稿ではかなり明確になったものの、本論文の出発点が学位申請者が現代社会に対して抱く強い危機感にある以上、動機論にもっと紙数を割いたほうがよい。その際には、かなりの文学的な表現力も求められよう。

７）社会学的・思想史的な考察を加えたら、本論文はより広い分野で注目を集めるにちがいない。

このように、学位申請者が今後さらに学問的に成長していってほしいという期待をこめた発言もなされたものの、本論文は、宗教学研究としてのみならず、閉塞状況に陥っている現代社会の突破口を見いだす試みとしても高く評価できるものである。また、人間と社会の有機的連関に関する新しい学際的研究をめざして創設された人間社会論講座の文化社会論分野にふさわしい内容を備えている。

よって、本論文は博士（人間・環境学）の学位論文として価値あるものと認める。また、2009 年 1 月 29 日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。